

P-241 ヒト卵巣癌の腹膜播種におけるFSHとFSHR受容体(FSHR)の意義

日本大

五十嵐稔枝、大谷 香、坂元秀樹、
斉藤綾子、石井裕子、佐藤和雄

〔目的〕我々は、FSHはFSHRを介して上皮性卵巣癌の増殖を促進し、そのsecond messengerとしてprotein kinase Cが関与し、卵巣癌においては正常卵巣とは異なる細胞内情報伝達機構が作動することを報告してきた。一方腹膜播種は卵巣癌の主な進展形式であり予後不良の一因となっている。今回卵巣癌の腹膜播種におけるFSHとFSHRの役割についてヒト漿液性卵巣癌細胞(HRA細胞)とヒト卵巣癌組織を用いて検討した。〔方法〕HRA細胞をRPMI 1640培地で培養し、1)ヒト羊膜での細胞増殖とFSHの影響、2) autocrine motility factor receptor (AMFR)の発現とFSHの影響を検討した。さらにHRA株、卵巣癌症例(n=10)の原発巣、腹膜播種巣におけるFSHRの発現(cDNA 562-870を増幅)をRT-PCR法で検討した。〔成績〕1)HRA細胞はFSHの添加(n=5)により基底膜を破り緻密層へ浸潤したが、FSHの非添加(n=5)では浸潤はわずかであった。2)HRA細胞のAMFR発現はFSHで増強した。3)HRA細胞はFSHR mRNA陽性であった。4)原発巣、播種巣においてFSHR mRNAの発現を認め、播種巣における発現陽性率は原発巣より高頻度に認められた。〔結論〕FSHはFSHRを介して卵巣癌細胞の浸潤性を増加させ、その作用にはFSHによるAMFR誘導の関与が示され、FSHは増殖促進作用のみならず癌細胞の浸潤・転移性の獲得にも関与する可能性が示唆された。また播種巣で高率にFSHRが認められたことは、FSHがFSHRを介して腹膜播種の機構に関与することが示唆された。

P-242 Estrogen Receptor陽性卵巣癌の臨床病理学的検討

岩手医大

藤本裕子、松田壮正、西谷 巖

〔目的〕Estrogen標的臓器である子宮や乳腺はその発育がEstrogenによりコントロールされ、これらのホルモン療法はEstrogen Receptor (ER)の有無が治療効果、予後に影響する。卵巣は、Estrogenを産生分泌するにもかかわらず、卵巣癌の一部は、ER陽性であることが明らかになった。そこで、ER陽性卵巣癌の頻度を検討し、その意義についても明らかにする。

〔方法〕卵巣癌16例の凍結切片に、抗ERモノクローナル抗体(Dainabott)を用いて免疫染色をおこない、同時に、組織のER量をDextran-Coated Charcoal Method (DCC) 法によって測定した。

次に、集積されている卵巣癌組織パラフィン切片に熱処理を加えERの抗原性を回復させ、免疫染色を行った。

〔成績〕免疫組織化学的には、漿液性腺癌組織の36%(4/11)、粘液性腺癌の50%(1/2)、類内膜癌の67%(2/3)が陽性像を示した。これらの組織はDCC法では7fmol/mg.protein以上の測定値を示した。

パラフィン切片による検討では、漿液性腺癌で31%、粘液性腺癌で18%、類内膜癌で78%が陽性であった。

〔結論〕生理的にEstrogenを産生、分泌する臓器から発生した癌組織に高頻度にERが存在することを明らかにした。この事実は、卵巣癌においてAutocrineないしParacrine増殖調節機構が存在し、卵巣癌の内分泌化学療法の有効性を示唆した。とくに、類内膜癌が高い陽性率を示すことからこの腫瘍の組織発生に注目した。抗ER抗体を用いた免疫組織化学的検討は、卵巣癌の治療法の選択に、極めて重要な情報を与える可能性をえた。